



溶連菌感染症とは

β -A群溶血連鎖球菌への感染を原因とし、3歳以上では溶連菌性咽頭扁桃炎を起こします。のどの痛みを訴え、38-40度の発熱、扁桃の腫脹を認めます。菌毒素による腹痛や嘔吐を認める場合もあります。3歳未満の乳幼児の場合、軽い鼻炎・咽頭炎及び中耳炎を長期(2-4週間)に渡って示す場合もあります。抗原性の異なる溶連菌が多数存在するため、一度だけでなく、何度も感染します。

溶連菌性咽頭炎の潜伏期は2-5日で、口腔ぬぐい液による迅速診断キットを用い、10分ほどで診断が可能です(本来の診断は咽頭培養によります)。適切な抗生物質を内服した場合は2日ほどで他の人には感染しなくなります(無治療の場合は約3週間)。抗生物質内服開始後2日間ほどは登園・登校を控えてください。小中学校の場合は「溶連菌感染症」と報告すると、「出席停止」として扱ってくれます。

右欄の3つの合併症をきわめてまれに起こすことがありますので、念のため気に留めておいてください。

入浴は、感冒などと同様、高熱がなければ差し支えありません。熱のある間は多めの水分補給を心がけてください。御兄弟(概ね3-15歳)がいらっしゃる場合、抗生物質の予防的投与も有効です。

要するにただの咽頭炎・扁桃炎で、過度の心配は不要ですが、抗生物質だけは終わりまできちんと飲ませて下さい。

- 「猩紅熱」と呼ばれる、全身の発疹症を伴う場合があります。発熱後3日ほどして、頬部・臀部などに赤い小さい斑点が出現し、これが次第に全身に広がります。イチゴ舌・口囲蒼白と呼ばれる特徴的所見を認める場合もあります。これは菌体毒素に対する過敏反応とされています。
- 「溶連菌感染後腎炎」と呼ばれる急性腎炎を、咽頭扁桃炎の発症後2～3週後に起こすことがまれにあります。のどの症状が軽快後ひと月ほど、まぶたのむくみ、足のむくみ(靴が履けないと訴える場合あり)、おしっこが少ない、などの症状がないか気を配ってください。扁桃炎発症後2～3週で尿検査のため再診していただく場合もあります。
- 「リウマチ熱」と呼ばれる、高熱、全身の関節痛、紅斑などを伴う病態を、やはり扁桃腺の軽快後2～3週後に認める場合があります。
- 上記のうち、「溶連菌感染後腎炎」と「リウマチ熱」はきわめてまれにしか起こりませんので、過度の心配はしないでください。適切な抗生物質を10-14日間内服することで、更に発生頻度を下げることができるとされます。